新羅義寂『無量寿経述義記』の一考察

――世親『浄土論』の位置付けについて――

梯　信暁

新羅義寂の伝は未詳であるが、諸先学の研究により、彼が法相と華厳とを承けていること、七世紀末から八世紀初にかけて活躍した人物であることが知られる。[1] この時代は新羅浄土教の全盛期にあたる。新羅浄土教の特色の一つとして、『無量寿経』の研究が盛んになされたということがあげられ、法位・元暁・義寂・憬興・玄一等が『無量寿経』の疏を著している。この中、法位・義寂のものは現存しないが、我国の平安・鎌倉時代の章疏中に多くの引用が見られ、概ねその内容を知ることができる。[2] 右の五師の中、生没年の明らかなのは元暁（617―686）のみだが、他の四師もほぼ同時代である。ただ、憬興・玄一の著作中に法位・元暁の説が引用されているかことから、法位・元暁は憬興・玄一よりも先輩であると考えられる。然るに、義寂の説は、他師の著作中にあまり触れられていないようであり、又、義寂の説には独特のものが多くて、その影響関係がつかみにくい。

そこで、本稿では第一に、義寂の『無量寿経述義記』（以下『述義記』と略す）の特徴の一つである、世親『浄土論』の扱い方について考察し、第二に、その説が、新羅浄土教の上で、どのように位置付けられるかについて考えてみようと思う。

まず、義寂の『浄土論』観を明らかにしたい。『浄土論』を論ずる際、古来問題とされるのは、この論の所釈の経は何かということである。良忠の『論註記』巻一には、

無量寿経、挙二所依経一。此通二三部一。以下下文云丙釈迦仏在二王舎城及舎衛国一、説二無量寿仏荘厳功徳甲故。以二五念門理通二三経一故。義寂云、此論是集義論。非二是専釈二一部経文一已上[3]

とあり、三経通申説を補佐する資料として義寂の説があげられている。この良忠の記述に依り、それ以降の註釈書の多くが、義寂を通申論の立場をとる者として扱っている。[4]

しかしながら、『述義記』の逸文を見ると、義寂は「浄土論の三厳二十九種荘厳功徳は、無量寿経に依って説かれてい

る」という立場をとっているように思われるのである。

即ち『述義記』巻上に、

此経（無量寿経）所レ明、即是阿弥陀仏一方之所現也。創建ニ勝目一、則四十八願具足成就。終標ニ妙果一、則二十九徳円満荘厳。[5]

とあって、義寂は『無量寿経』の四十八願と『浄土論』の二十九功徳を、因と果の関係で見ている。この中、因、即ち四十八願を釈する部分[6]では、

有釈、此願相従為レ三。一摂浄土願、二摂法身願、三摂衆生願。謂第十二、十三、十七是摂法身。第三十一、第三十二是摂浄土。余四十三是摂衆生。

と、浄影寺慧遠『無量寿経義疏』巻上[7]の説をあげた後、『浄土論』を用いて、

由ニ摂浄土願一、得ニ国土荘厳十七功徳一。由ニ摂法身願一、得ニ仏身荘厳八種功徳一。由ニ摂衆生願一、得ニ菩薩荘厳四種功徳一。

と述べ、つづいて、四十八願を各々三厳二十九種の荘厳功徳に配当してゆくのである。それによると、義寂は、第一～第三十二願を国土荘厳即ち摂浄土願に、第三十三～第四十願を仏荘厳即ち摂法身願に、第四十一～第四十八願を菩薩荘厳即ち摂衆生願に配当している。[8]浄影の説では、第十二・十三・十七が摂法身、第三十一・三十二が摂浄土、その他が摂衆生であるから、義寂は、浄影からその名目だけを借りて、内容は『浄土論』に依って全く組み替えていることがわかる。

次に、果の部分を釈するにあたり、義寂は『無量寿経』巻上の弥陀果徳の文を『浄土論』の国土荘厳十七種功徳に配当している。[9]仏・菩薩の荘厳功徳への配釈は、逸文中には見られないが、三厳二十九種功徳の全てを『無量寿経』の文に配当しているということは推測に難くない。

さらに、『述義記』巻中に次のような記述がある。

阿弥陀浄土有ニ多品一故。……観経及陀羅尼経所説土相、是化浄土。説ニ九品人皆得レ生故。説レ有ニ父母摩王等一故。小阿弥陀所説土相、是受用。説ニ故（一本無）彼唯有ニ阿毘跋致諸菩薩一故。又説ニ多有ニ補処菩薩一。故知非ニ是変化浄土一。彼声聞等是化非ニ実（一本無）人一。今此所説両巻経中、顕ニ受用土一。論依ニ此経十七種荘厳一故。唯此経中具ニ十七等一、非ニ余経一故。[10]

即ち、『浄土論』所説の十七等の功徳が具足しているのは『無量寿経』のみであるという。そして、『観経』と『鼓音声王陀羅尼経』とは、変化土を説くというのだから、受用土を説く『浄土論』の所釈の経という点では、この二経は外されるのである。

それでは、如何なる理由で、義寂は『浄土論』を通申論と判じたのであろうか。これについては、『無量寿経』と同じく受用土を説くとされる『阿弥陀経』に対する見解を見る必要があろう。

『述義記』の逸文中には、『阿弥陀経』と『浄土論』の関

係に触れた箇所は見られないが、『阿弥陀経』所説の極楽荘厳を『浄土論』の二十九功徳に配する釈が、靖邁の『称讃経疏』[11]、基のものと伝えられる『阿弥陀経疏』[12]、元暁の『阿弥陀経疏』[13]等に見られ、義寂の説に何らかの影響を与えたものと思われる。この中、元暁は『阿弥陀経』所説の依正二報の荘厳を釈するにあたり、『浄土論』を用いて、依報に十五功徳、正報に四功徳をあげる。この中には『浄土論』の二十九功徳とやや異なるものもあり、数の点でもかなり不足している。義寂が『無量寿経』を指して「唯此経中具二十七等一」と言うのは、このあたりの説を鑑みての上でのことと思われる。

以上の如く、義寂は、『浄土論』の三厳二十九種荘厳功徳は主として『無量寿経』に依って説かれたものとするのであるが、この論を通申論と位置付けた理由の一つとして、『阿弥陀経』所説の荘厳中に『浄土論』の説に合致するものが含まれるとする元暁等の釈を参酌したということが考えられるのである。

第二に、この義寂の説が、新羅浄土教の上でどのように位置付けられるかを考察したい。

既述のように、義寂の説には彼独特のものが多く、他師との影響関係がつかみにくいのだが、『無量寿経』の弥陀果徳の文を『浄土論』の国土十七種功徳に配当するという釈は、玄一と憬興とに見られる。

玄一の『無量寿経記』巻上では、弥陀果徳の文を釈するにあたり、

一云、上来明二浄土因一已。自下第二頭二浄土果一。義積師云、往生論釈二此以後経文一。是故彼論云、我依修多羅真実功徳相説願偈総持与仏教相応故。解云、若此経中不レ説二十七功徳等一者、論至(主イ)依二何経一故、言二我依等一。以二観経等三浄土経(観・小・鼓音経)皆不レ説故。……彼論云二真実功徳相一者、謂拠レ勝故、且説二他受用土相一。

等と述べ、以下経文を十七功徳に配当してゆく。[14] ここに言う義積が誰かは不明であるが、この部分の記述は義寂の説にほぼ一致し、加えて、義寂・義積とも、音は同じであって、あるいは、この義積は義寂の誤かもしれず、玄一が何らかの形で義寂の説を参考にしたと考えてもよさそうである。

憬興の『無量寿経連義述文賛』巻中にも、同様の釈が見られるが、[15] 憬興が義寂以降であることは、既に先学によって指摘されている。[16]

さて、玄一・憬興には、義寂同様『無量寿経』の弥陀果徳の文を『浄土論』の国土十七種功徳に配する釈は見られるのだが、両者共四十八願を二十九功徳に配する釈は採らない。義寂によると、四十八願と二十九功徳は因と果の関係であり、又、弥陀果徳の文は本願成就文と言えるものであって、片方を採って片方を採らないというのは理にかなわない。

玄一は、法位の説を承けて四十八願を釈している。[17] 法位は新羅浄土教の先駆とされる人物で、玄一の釈には、この法位の影響が顕著である。憬興の四十八願釈は、前掲の浄影の説に忠実である。[18] 浄影が新羅浄土教全般に大きな影響を与えたことは周知の通りである。彼らが義寂の説を採らなかったのは、伝統的な浄影や法位の説を逸脱することが憚られたがためと考えることができよう。

それでは、何故、弥陀果徳の文を十七種功徳に配する釈のみは採用したのであろうか。

新羅浄土教は、概ね法相宗に属すると考えてよいのだが、法相宗では、『摂大乗論』『仏地経論』所説の十八円満を用いて仏土荘厳を釈するのが一般的で、基の『義林章』仏土章[19]や、法位の『無量寿経義疏』[20]等に見られる。義寂は、この十八円満を『浄土論』の二十九功徳に結びつけるのである。[21] 十八円満は他受用土の相を説くものとされている。一方、『浄土論』は蓮華蔵世界を説く。この蓮華蔵世界を、他受用土と位置付けて、十八円満に結びつけることは、法相宗の教理の上で矛盾しないものである。加えて『浄土論』が世親の作であることも重視すべきであろう。

以上『浄土論』の扱い方に着眼して、新羅浄土教における義寂の位置を論じ、次のような結論を得るに至った。

義寂は『無量寿経』弥陀果徳の文に説かれる浄土を受用土と判じ、これを『浄土論』を用いて釈した。これは、元暁『阿弥陀経疏』等の説を参酌して、伝統的な十八円満依用の態度を一歩進めたものであるが、法相宗の教説の範疇を逸脱するものではない。この説は、玄一・憬興に影響を与えている。弥陀果徳を『浄土論』で解したのだから、その因である四十八願を二十九功徳に配するのは極めて自然である。しかし、この説に従うと、伝統的な浄影・法位の説を逸脱することになるため、玄一・憬興は敢えてこれを採らなかったと考えられるのである。

1 恵谷隆戒『浄土教の新研究』93頁―等　2 本稿では上掲恵谷書付録所収の復元本をテキストとする（以下、恵谷本と言う）　3 浄全一・257上、恵谷本432頁　4 了恵『論註略鈔』、聖聡『註記見聞』等　5 恵谷本415頁　6 同419―423頁　7 大正三七・103b　8 前掲恵谷書100―101頁　9 恵谷本425―432頁　10 同436頁　11 古佚。拙稿「源隆国編『安養集』について」付録（『南都仏教』56所収）参照　12 大正三七・319b―323a　13 同349a―c　14 続蔵一・三二・二・202右―206右　15 大正三七・155a―158a　16 前掲恵谷書60、117頁等　17 続蔵一・三二・二・198左―　18 大正三七・150c―　19 大正四五・369b―　20 恵谷本400―402頁。深貝慈孝「新羅法位浄土教の研究」（『戸松教授古稀記念浄土教論集』所収）　21 恵谷本425頁―。尚、このような説は、竜興『観経記』巻上（恵谷本372頁―）等に見られる。

〈キーワード〉　義寂、元暁、玄一、浄土論

（早稲田大学大学院）